

2016 vol.36 夏号 源流からのたより

ぽたいたい!

源流のひとしづく



CONTENTS

- ・ 事務局長コラム
- ・ 「源流学」⑩
- ・ 源流の主役たち
- ・ 100年前の奥駈道
- ・ 吉野川紀の川しらべ隊
- ・ トガサワ丹生川止神社社へ樹
- ・ 源流学の森づくり



森と水の源流館



住所 奈良県吉野郡川上村宮の平
公益財団法人吉野川紀の川源流物語
TEL 0746・52・0888
FAX 0746・52・0388
URL <http://www.genryuu.or.jp>
E-mail morimizu@genryuu.or.jp



川上村へ寄せたオリジナル曲の演奏と美しい映像との共演（神戸にて）

新年度がスタートして3カ月が経過。財団事務局では決算や理事会・評議員会の準備など前年度の報告に追われる時期にも、「水源地の森ツアー」や「吉野川紀の川しらべ隊」などの定例事業が進んでいます。また毎年常に新しいチャレンジを忘れず、ゴールデンウィークには川上村の匠の聚が開催する「アートフェスティバル」と連携し、山村が抱える交通アクセスの課題解決実験として『移動源

今年度のスローガンは『行動化』

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語 事務局長 尾上 忠大

流館』を、また川上村のイメージソング『源流の郷』の作者、山川亜紀さんのコンサートで音楽と映像のコラボレーションによる水源地の村からの発信などを試みました。昨年度構築した流域連携の具体的しくみ『紀の川じるし』もスタートしています。



「紀の川じるし」のシールラリー

このあとも引き続き意欲的に事業を進めていきますが、財団ではその年の取組みに際して、いつもスローガン（目標）を定めます。不変の目標である『川上宣言』の具現化に加えて、2016年度のスローガンは『行動化』です。

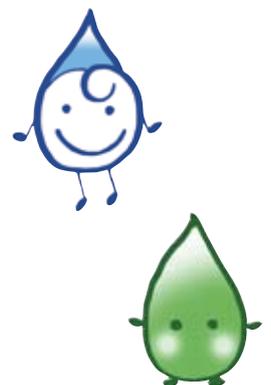
これは昨年度、環境省の「地域活性化に向けた協働取組の加速化事業」で取り

組んだESD (Education for Sustainable Development) = 持続可能な社会づくりの担い手を育む教育) から学んだキーワードです。単なる知識の習得や活動の実践にとどまらず、直面する課題の発見・探究・解決の過程で自らが持続可能な社会の構築に向け、意志を決定し、行動する能力・態度を身につけるための工夫を継続していくことが必要ということです。

川上村は『川上宣言』を単に理念に留めず、740ヘクタールの手つかずの天然林を購入するという行動に表しました。これに続くような誰にも理解しやすい具体的な行動を財団として行わなければなりません。そのうえで今年度さらに目指すことは、利用いただいた方、出会った方々の「行動化」につなげる。わかりやすい例として、あらためてアクリルたわしに着目した企画を実施。見て、知って、気づいて、帰って行動する。みなさんとともにそんな基本的なところに立ち返って進めてまいります。

この財団の取組みは、なかなか立体的かつ連続的だと思いませんか？ いつも

工夫とアイデアによって進める仕事です。興味のある方はぜひお問い合わせください。



森と水の源流館企画展示

「アクリルたわしの世界」

10月31日(月)まで開催中

ワークショップ

「アクリルたわしを作ろう」

8月6日(土) 10時・15時

(各回 20人・当日先着順)



アクリルたわしなどを使うことで、台所からの排水を少しでもきれいに流す「行動」を。

昔

は貴重な存在であったが、いまは忘れられていく「こと」や「もの」がたくさんある。

そのひとつの「東熊野街道」は、昔の川上村の幹線歩道であったが、現在は、大部分が廃道になっている。唯一、通ることができているのが、柏木から伯母谷までの間である。そもそも東熊野街道の起点は、伊勢街道の要衝である吉野町宮滝。そこから山道を登っていくと、吉野町と川上村の境に五社峠があり、そこには川上鹿塩（かわかみかしお）神社が祀られている。峠の境は、高さ十数メートルの深い堀割になっており、そこから下に降りると、西河の集落に出る。

西

河集落から少し下った所で道が二つに分かれているが、上に向かって右側の道は、土倉庄三郎翁が自費で造った道の第一期東熊野街道で、明治6年（1873年）に計画、明治16年（1883年）に完成したものだ。もう一方の入り道は、第二期東熊野街道で、明治33年（1900年）ごろ、土倉翁の還暦の祝いに開設したといわれ、西河集落のほぼ真ん中に降り着くようになっていく。

当

時、この道を通って、明治政府の要職であった板垣退助氏、山県有朋氏、大隈重信氏ら、明治元勳の人たちや、林業の教えを請う人々など、当時10万人以上の人が土倉屋敷を訪れたと伝えられている。

現

在、西河から柏木までの道は寸断され、通行は不可能となってしまう。柏木郵便局や、昔の佇まいが残る旅館の朝日館を過ぎた先に、右手の山側に入っていく道がある。

この道が現存する東熊野街道であり、山上ヶ岳に登る道でもある。道の山側には丁石といて、山上ヶ岳までの距離を記した石碑が建つ。距離の単位は、昔の尺貫法で、丁単位で記されている。一丁という単位は、何メートルか知っているかな。一丁とは、約109mのことで、柏木から山上ヶ岳までの距離は116丁、つまり約12・6kmである。ここからは丁石を登っていくと、小さな屋根の平地に出る。そこには昔は茶屋峠といって茶屋があって、街道を行く人や山上ヶ岳の登山者をもてなした。ここは分岐点になっていて、ここから少し下れば、大迫の在所へ至り、国道169号線へも通ずる。左に下ると、「弁天の窟（弁天窟）」と「蟠竜の窟（蟠竜窟）」と呼ばれる2つの洞窟があり、この道で行くと、弁天の窟までは行けるが、蟠竜の岩屋には、下の国道から入る道からしか行けない。今年3月の達ちゃんクラブでは、蟠竜の岩屋に入るイベントを行ったが、参加者から好評だった。

達ちゃんが語る

子どもたちに伝えたい「源流学」

⑪土倉翁が開いた東熊野街道



緑線・・・現在の国道169号線 赤線・・・旧東熊野街道

もいわれ、山上ヶ岳から降りてきた行者さんが行をしていたという。別名、「こうもり窟」と呼ぶ。役行者が開いた行場と窟、不動窟とともに、

こ

の蟠竜の窟は、弁天の窟、不動窟とともに、

もいわれ、山上ヶ岳から降りてきた行者さんが行をしていたという。別名、「こうもり窟」と呼ぶ。役行者が開いた行場と窟、不動窟とともに、

も

う一つの道は、茶屋峠から少し登っていく道で、大迫の在所の上に至る。ここで山上ヶ岳へ登る道と分かれ、伯母谷の在所へ向けて登っていくと、左側に十二社神社が建っている。立派なお宮さんが残念なことに、いまはお祀りをする人がいないので荒れる一方である。

そ

ここから街道は下っていく。伯母谷の在所の近くに、道から少し中に入ったところに天誅窟がある。街道からは見えない場所であるが、幕末の時代の歴史にもある。天誅組の負傷者をかくまった洞窟だ。そこを過ぎると伯母谷の在所に至る街道は、伯母谷より伯母峯を通って上北山村へ通じているが、いまは廃道になり、通行不能である。

現

在、通ることができない東熊野街道は、柏木から伯母谷までが開くまで利用されていた。森と水の源流館や、達ちゃんクラブでも、イベントで時々歩いているが、ウォーキングにはちょうどよい街道で、今後も長く残していきたい街道である。

が開くまで利用されていた。森と水の源流館や、達ちゃんクラブでも、イベントで時々歩いているが、ウォーキングにはちょうどよい街道で、今後も長く残していきたい街道である。

※連載では、「聞き書き」でコミュニティライターの西久保智美が担当します。

(4) ジムグリ (ナミヘビ科)

本種も日本固有種で日本本土と周辺のほとんどの島に分布し、丘陵から森林、平地、草原、畑など様々な所に生息しています。しかしジムグリの和名が「地潜り」に由来する通り、本種はよく地中のモグラやネズミの巣穴にもぐって、それらを捕食して生活するため、人目にふれることが比較的少ないので、珍しいヘビのグループに入れました。全長 70 ~ 100cm。

成体は、体の割に頭部が小さく、頸部（首）があまりくびれない棒状の体型をしています。また、成体の頭は地もぐりに適応した独特の形状をしており、吻（鼻先）が頑丈に盛り上がり、口内に土砂が入りにくいように上顎が突き出て、下顎に覆いかぶさる形になっています(写真5)。幼体では、



写真5. ジムグリの口



写真6. 市松模様のジムグリのおなか

孵化して日が浅くてもネズミやモグラの子を飲まなくてはならないため、頭部が割合大きいです。そして幼体の体色は、鮮やかな赤橙色の地に黒い斑紋が目立つ派手な元禄模様があり、頭には黒い2本の横線とV字型の線と1本の縦線とがあります(写真7)。そして、おなかに市松模様があります(写真6)。しかし、成長するとこれらの派手な色や模様は薄くなり、中には斑紋のないものも見られ(写真8)、地色にも明るいものや暗いものや色々な個体変異があります。本種の気性は至って穏やかで内気で滅多に咬みつきません。その点は前記のシロマダラとは対照的です。なお、両種ともに比較的歯が短いので、獲物を狩るときは体を相手に巻きつけて、締め付けることが多く、両種とも締め付ける力が強いのは共通点です。



写真7. 元禄模様のジムグリ幼体の背中



写真8. ジムグリ成体

(あしがき)

以上で川上村のヘビ8種の紹介を終わります。平成25年と28年の2回に分かれた形になりましたが、これで源流の主役たち全員がそろいました。ヘビという生き物は、多くの人に嫌われたり敬遠されたりしがちですが、彼らのことを正しく知るためには、その入り口として各種類の概要を知ることも大切です。しかし単なる知識だけに終わるなら何の意味も何の価値もありません。大切なのは自然の中で実物のヘビに出会うことです。そこで一切の先入観や思い込みを捨て、ひたすら自分の眼と五感のすべてをもって直接にヘビと向き合い、彼らの発信するメッセージを虚心坦懐に受容してみてください。そうすれば、様々な発見があり、その不思議さや素晴らしさ、美しさに我を忘れて驚嘆することと思います。ヘビ以外のあらゆる生き物や自然の様々な現象についても同じです。知識ではなく純粋な感性をもって出会い、驚嘆の喜びを体験しましょう。



川上村のヘビについて

森と水の源流館では、平成25年の巳年に「川上村のヘビについて」と題して、知名度の高い普通に見られるマムシ、ヤマカガシ、シマヘビ、アオダイショウの4種を紹介しましたが、今年は一般にはほとんど知られていない珍しいヘビたち4種を取りあげることになりました。すでに「春号(35号)」でタカチホヘビとヒバカリの2種を紹介しましたので、今回はその続きでシロマダラとジムグリの2種を紹介します。これで、川上村のヘビは全部で8種となります。



井手 泉 (源流人会会員)

珍しいヘビたち4種の概要

(3) シロマダラ (ナミヘビ科)

日本の本土とその周辺の島に分布する日本固有種です。山地から平地に生息し、夜行性で、瓦礫などのものかげに潜む傾向が強く、日中は人目にふれにくいため、ほとんど知られていません。全長30～70cm、灰白色または赤味がかった薄い灰色の地に、くっきりとした黒い帯状の横しまの斑紋があります。このマダラの模様^{こうさい}が本種^{こうさい}の分かりやすい特徴です(写真1)。そのほか、本種は頭が著しく扁平で、小さな黒い眼(瞳も虹彩も黒)をしています(写真2)。これも本種を見分けるポイントの一つです。

本種の生態的特徴としては、前述の夜行性のほか、爬虫類を主食とする狭食性があり、通常はカナヘビやトカゲ、ヤモリ、そして小型のヘビを食べます(写真3)。ちなみに前回紹介したタカチホヘビも夜行性で、小型の脆弱なヘビ^{ぜいじやく}なので、本種の絶好の獲物になっていることが容易に推察されます。同様に夜行性のヤモリと本種との間にも密接な関係のあることが考えられ、川上村上谷の小屋で、扉のガラスに張り付いている本種の抜けがらを確認したとき、ここではヤモリを常食としている可能性が高いと思いました。そのことを確かめるため、小屋の管理者の許可を得て、近々に夜間調査を行う予定です。

そのほか、本種が目立つ特徴としては、気性が荒く、よく咬みつ^かく習性があることです。首をS字型に曲げて威嚇^{いかく}(写真4)してから咬みつ^かくばかりでなく、静止していても急に予告なしに咬むことがしばしばあります。しかし、無毒で浅い傷が付く程度なので、心配は要りません。そのほか体を急に捻^{ひね}って尾を鞭のように使って打ち付ける習性があり、また石垣やブロックなどの縦型のすき間で、縦向きにトグロを巻いて休んだりするなど他種とは少し異なる筋力を使うユニークなヘビです。



写真1. マダラの模様の成体



写真2. 頭は扁平で、眼は黒い



写真3. ニホンカナヘビを食べるシロマダラ



写真4. S字型に威嚇するシロマダラ

その二三

歴史担当の成瀬匡章が、吉野川・紀の川流域の遺跡について紹介します

100年前の奥駈道

木本光三郎編『吉野群峰』『吉野群峰写真集』

今年、吉野熊野国立公園制定80周年にあたり、「大台ヶ原・大峯山ユネスコエコパーク」（1980年認定）が川上村全域にまで拡張されるなど、大峯山・大台ヶ原に注目が集まっている年です。

今から100年前、吉野熊野国立公園が制定される少し前、大峯山・大台ヶ原の自然に注目が集まり多くの登山者が訪れるようになりました。それに伴い各種の登山案内・登山の記録が出版されてい



写真1 「御番關掛茶屋」（『吉野群峰写真集』）

ます。その中でも特に優れた内容を持つのが『吉野群峰』『吉野群峰写真集』です。これらは大正4（1915）年7月26日から31日にかけて行われた吉野群峰調査団の調査記録を纏めたものです。吉野群峰調査団は、実業家の木本光三郎が呼びかけ、伊藤忠兵衛（伊藤忠商事の初代社長）・阪本仙次（吉野鉄道社長）など関西の実業家を中心となって結成されました。最新の登山道具を揃え、写真師や30名を超える人夫を引き連れて、吉野山から大峯山、大台ヶ原を縦走しました。これだけ聞くとお金持ちの登山ツアーというイメージがありますが、当時の大峯奥駈道は消滅しかかった道であり、決して楽な登山ではなかったようです。この調査参加者への記念品として製作されたのが『吉野群峰』『吉野群峰写真集』です。後に一般向けにも増刷されたらしいのですが、発行部数はかなり少なかったようです。



写真2 「小天井ノ山腹之一行」（『吉野群峰写真集』）

『吉野群峰』は単なる紀行文ではなく、大峯山の修験や吉野林業の紹介、動植物の記録、大台ヶ原の保護活動と呼びかけた白井光太郎の講演録などが掲載されています。その中でも特に優れた内容を持つのが『吉野群峰』『吉野群峰写真集』です。これらは大正4（1915）年7月26日から31日にかけて行われた吉野群峰調査団の調査記録を纏めたものです。吉野群峰調査団は、実業家の木本光三郎が呼びかけ、伊藤忠兵衛（伊藤忠商事の初代社長）・阪本仙次（吉野鉄道社長）など関西の実業家を中心となって結成されました。最新の登山道具を揃え、写真師や30名を超える人夫を引き連れて、吉野山から大峯山、大台ヶ原を縦走しました。これだけ聞くとお金持ちの登山ツアーというイメージがありますが、当時の大峯奥駈道は消滅しかかった道であり、決して楽な登山ではなかったようです。この調査参加者への記念品として製作されたのが『吉野群峰』『吉野群峰写真集』です。後に一般向けにも増刷されたらしいのですが、発行部数はかなり少なかったようです。



写真3 「彌山行人堂附近」（『吉野群峰写真集』）

の奥駈道や大台ヶ原の状況を詳細に知ることができ、学術的な価値を高めています。奈良県立図書館にも1部架蔵されていますので、興味のある方は是非ご覧ください。

参考文献

北村信昭 1983年『奈良いまは昔』奈良新聞社

木本光三郎編 1917年『吉野群峰』

積精堂

木本光三郎編 1916年『吉野群峰写真集』



5月8日、「吉野川紀の川しらべ隊」吉野山のコケをしらべよう」を、吉野山の入口、吉野駅前から七曲りの坂の入口付近で、実施し、23人が参加しました。

今回は、コケ植物をテーマに実施しました。コケ植物は大気汚染の指標性が高いことから、最初にバス停の排気ガスがガンガンかかる場所の樹幹のコケをしらべてみました。すると、サヤゴケ、コモチイトゴケがわずかに見られるだけででした。これは、亜硫酸ガス濃度（年平均）に換算すると、0.02-0.04ppmにあたり、悪い方から2番目の値を示していました。



樹幹のコケを観察する参加者の皆さん



長さ3mmほどのサヤゴケ胞子体もルーペで見るとおもしろい

一方、森のある方へ移動すると、空気がきれいなどところに生育するイワイトゴケなど、多様なコケ植物がたくさん見られました。

新緑のコバノチョウチンゴケやホソバオキナゴケといった、コケ庭を代表するような種も観察できました。また、石垣では、ハリガネゴケ、チュウゴクネジクチゴケ、ホソバギボウシゴケ、エゾスナゴケ、ナガバチヂレゴケ、ハマキゴケ、スズゴケ、コモチイトゴケ、ナガヒツジゴケ、ハネヒツジゴケ、ヒロハツヤゴケなど多くの種類を観察できました。

ご参加のみなさま、ありがとうございました。

今回の行事は、環境省吉野熊野国立公園指定80周年&拡張記念パートナーシップイベントとして実施しました。環境省吉野自然保護官事務所の協力を得て、同事務所の青谷自然保護官補佐、井藤自然保護官補佐にも協力いただきました。この場をお借りして、深謝いたします。



生きた化石植物ともいわれ、国のレッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類に指定され、絶滅が心配されている日本固有の針葉樹、トガサワラの苗木2本を丹生川上神社上社に奉納しました。苗木は、国立研究開発法人森林総合研究所材木育種センター関西育種場（岡山県勝山町）から当館に恵贈いただいたものです。これは、同育種場で実施している「絶滅危惧種トガサワラの保全に関する研究」に基づき、川上村三之公で採集された種子から実生を育てて苗を作ることに成功したもので、森と水の源流館はその採集に協力してきました。



植樹する辻谷達雄さん（前館長）と望月康廣宮司



三之公トガサワラ原始林

トガサワラは川上村では、「三之公トガサワラ原始林」が国の天然記念物に指定されて保護されている他、川上村が保全する三之公の「吉野川源流―水源地の森」にも比較的多くの生育が見られます。また、柏木付近以南の険しい尾根などにも見ることができですが、川上村民にとっても、そんなに身近な植物とは言えない貴重な植物です。この奉納植樹によって、神社境内で、身近にトガサワラを見ていただけると思います。そんな木が川上村に存在するというを知ることから、世界に誇るべき川上村の自然環境を見つめなおして、大切にしていく契機になればよいと思います。

このトガサワラの苗木はこれから100年、150年先には大きな大木となって川上村を見守ってくれていることでしょう。



源流学の森づくりとは、20年ほど前に伐採され、再生しつつある天然林を立派な源流の森に戻そうという取り組みです。

5月1日、どこまでも続く青い空に新緑が映えます。芽吹いたばかりのホオノキの葉やアケビやフジ、ミヤマガマズミの花などが道中を楽しませてくれる、少し初夏の気配も感じる日、吉野川紀の川の流域からなど12名の参加がありました。

山小屋に着いてさっそく防鹿柵やシイタケの栽培場所の補修に取りかかりました。近年、シカによる被害の話をお聞きすることがあるかと思えます。

隣接する水源地の森の調査からもシカ



シイタケのネット補修をしました



防鹿柵を整備しました

が樹皮を剥いだり、下層の植生を食べつくしたりということが明らかとなり、防鹿柵の設置が望ましいとの報告があります。このまま放っておくとシカの好ましい種の植物ばかりが生育する多様性に乏しい森になるかもしれません。森全体を囲うような大規模の柵では倒木などによる破損時に効果が低下するほか、修理や維持管理に費用がかかるため、小規模なものでも多数設置して破損時の被害を分散させ、修理も簡易にできるものが森の保全に良いと考えられています。

一汗かいた後は、せっかくの爽やかな天気ということで外に机と椅子を並べてお昼休憩にしました。ちょうどシカ肉のローストを差入れていただきましたので、もぐもぐしながらシカとの共存や生態系のバランスをとるのって難しいなと考えていたり考えていなかったり。

さて、午後も再び森づくりの作業です。設計図や見本があるわけではありません



お昼はオープンカフェっぽく



森の手入れは各自のペースで

ので補修といっても意外と難しく、参加者の皆様が見解を出し合いながら進めていきます。藪の状態のところを伐採して、柵の材料を調達もしました。気がつけば帰りの時間になっていました。作業は、現地への移動も含めて、しんどいことも多いですが、この森が育む水や様々な恵みが届くようにとの思いをこめて。

源流人募集



源流人とは かけがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です

源流人会とは 集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこうとする会です

ともに源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください

個人	2,000円
家族	3,000円
学生	1,000円
団体	10,000円

年会費 郵便振替 00940-1-331163

もりもり 水源地の森守募金

にご協力ください

ありがとうございました。

平成27年度、554,512円の森守募金をお預かりしました。奈良県内すべてと、和歌山県内の紀の川流域市町村の小学

4年生全員に配布した教材印刷費や源流域での斜面崩壊対策費用にあてさせていただきました。今後ともご支援をよろしくお願いいたします。



郵便振替 00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて